『草の葉』初版(1855)研究
ーWhitmanは何を行っているか

川崎　浩太郎

序

『草の葉』第３版の最後を飾る詩編、“So Long”において、Walt Whitman (1819--1892)は、読者に向かって次のように呼びかける。

Camerado, this is no book,
Who touches this touches a man,
(Is it night? are we here together alone?)
It is I you hold and who holds you,
I spring from the pages into your arms --- decease calls me forth.[1]

Whitmanは、特に初期の版において、『草の葉』は書かれたものではなく、一人の生きた人間であると繰り返し訴えている。あの悪名高いカタログで列挙される事物、そして『草の葉』それ自身、これらは、書かれたもの、つまり文字で代理表現されたものではなく、それぞれ実在する事物であり、一人の生身の人間である。このようにWhitmanは我々読者に訴えているのである。

初版の特異な形態もまた、こうした『草の葉』をもって、Whitman自身を表すというメトニミーに一役買っている。初版が他の詩集と異なっていた特徴の一つに、タイトルページに著者名が書かれておらず、代わりに著者とおぼしき人物の肖像が載せられていたことが挙げられる。つまり彼は、Walt Whitmanという、一つの固有名詞だけで、自分が表現されることを望まなかったのだ。さらに、その肖像は、その後に続く詩行と密接に関係していることが暗示されている。ダゲロタイプからリトグラフに起こされた

その肖像は、一本一本の細かい線によって一人の人物像を形作っている。つまり、『草の葉』の主人公であると考えられるその人物は、線/詩行(line)によって形作られているということが暗示されているのである。また、Whitmanは、当時流行していた骨相学に関心を持っていた。これは、人間の頭蓋骨が、その人の人格と一致するといった類の疑似科学であったが、当時は信憑性の高い科学として扱われていた。その論理は、形式（頭蓋骨）と内容（人格）とが一致していることを自明としていたわけで、冒頭の肖像画/骨格/形式がその後に続く詩行/人格/内容と一致していて何ら不思議はないということになる。Whitmanは、音声記号による恣意的な名称で『草の葉』、あるいは彼自身を代理表現されることを避け、形式と内容とが一致した、視覚映像によって、読者の前に登場することを望んだのである。

Whitmanは『草の葉』が書かれたものであるという考えを拒絶し、一人の人間として読者の前に立ち現れる。彼は、初期の版においては『草の葉』を「詩」という言葉で表現するよりも、「歌」あるいは「これ」という言葉で表現することを好んでいる。また、後年になって次のように警告している。

> "Leaves of Grass," indeed (I cannot too often reiterate) has mainly been the outcropping of my own emotional and other personal nature -- an attempt, from first to last, to put a Person, a human being (myself, in the latter half of the Nineteenth Century, in America,) freely, fully and truly on record. . . . No one will get at my verses who insists upon viewing them as a literary performance, or attempt at such performance, or as aiming mainly toward art or aestheticism.(2)

つまりWhitmanは、『草の葉』を文学作品ではなく、一人の人間として見よという主張を再び繰り返しているのである。我々が一人の人間を見るとき、その人が何を意味するかではなく、その人が何を行うか見るほうがより妥当である。従って、この一節は他の文学作品のようにその意味を考えるのではなく、「私が何を行っているか見よ」と読み変えることすら可能であるように思われる。誤解のないようつけ加えなくてはならないのだが、ここでいう "a literary performance" とは、「文学的業績」のことである。

Whitman批評は長いことその象徴、そして意味するものに対する解釈にとらわれてきた。しかし、我々がその膨大な詩行を目の当たりにしたとき、

安定した意味体系を読みとることは困難であり、またしばしば不毛でもある。言語哲学者J. L. Austinは、それまでの哲学の歴史が、言語を真か偽かという判定基準のみで検討してきたことを批判した。Austinは真偽の判断が可能な記述的な「事実確認的(constative)」な発話に対し、この基準に当てはまらない、「行為遂行的(performative)」という用語を導入した。(3)例えば、"I celebrate myself." と発話するとき、それは何らかの事態を記述しているのではなく、発話すると同時に、その行為を遂行しているのである。「賞賛する」という行為が発話されずに遂行されることはあり得ない。Whitmanは、『草の葉』、特に初期の版において、第一人称、現在形を多用している。こうした文体は、多分に行為遂行的要素を含んだものである。『草の葉』初版、特に後に "Song of Myself" と呼ばれることとなる冒頭の詩編は、何らかの出来事を描写した詩というよりも、一つの行為であり、それ自体が一つの出来事なのだ。本論では、『草の葉』初版においてWhitmanは何を行っているか、そして、それはどのように為されているか考察していきたい。

I

『草の葉』は身体的であり、直接的であり、時に我々読者を当惑させることすらある。Whitmanは、"Song of Myself" の後半で彼の聴衆を引き連れ、旅に出た後突然その調子を変え次のように個人的に読者に呼びかける。

> Listener up there! Here you . . . . what have you to confide to me?
> Look in my face while I snuff the sidle of evening,
> Talk honestly, for no one else hears you, and I stay only a minute longer. (85)

この一節においてWhitmanは何を行っているのだろうか。冒頭にある、"Listener up there!" という頓呼法によって、我々は詩を読んでいるのではなく、まるでWhitmanの話を聞いているかのような印象がもたらされる。さらに細かく言えば、"up" という一語によって、今、ここで、我々が『草の葉』を手に持ち読んでいることをまるでWhitmanは見透かしているかのような不思議な感覚がもたらされるのだ。そして、さらに畳み掛けるような "Look in my face" という命令によって、『草の葉』という一冊の

本を我々は詩人の顔として見ることを余儀なくされるのである。普通我々が本を読むとき、それを虚構として、何らかの事実を言葉で描写したものとして読む。しかしながら、このように呼びかけられたとき、我々は本を読んでいるのか、誰かと話をしているのか戸惑うこととなる。詩人はテキストの背後から我々読者に肉薄する。『草の葉』がこうした直接性を獲得しているのは、詩行の背後に隠れたWhitmanの「声」によってである。Whitmanの声は我々読者にその直接性を強く訴えるのだ。また、Whitmanは後年になって次のように述べている。

> Then, for enclosing clue for all, it is imperatively and ever to be borne in mind that Leaves of Grass entire is not to be construed as an intellectual or scholastic effort or Poem mainly, but more as a radical utterance out of the abysms of the Soul, the Emotions and the Physique--... (4)

『草の葉』は、詩人の肉体であると同時に「発話」なのである。まずはじめに、『草の葉』における「声」がどのように機能しているのか考察を進めていきたい。

『草の葉』は、我々読者に詩人の「声」を強く想起させるものであり、その直接性は、詩行の中から突然読者に呼びかけるという一つの行為によって示される。もちろん、現実には『草の葉』は書かれたものに過ぎないし、たとえ彼が声の優位を主張したとしてもそれは書かれたものを通して主張されるに過ぎない。それでも彼は、自らの「声」を強力にアピールするのである。

> My voice goes after what my eyes cannot reach,
> With the twirl of my tongue I encompass worlds and volumes of worlds.

> Speech is the twin of my vision . . . . it is unequal to measure itself.
> It provokes me forever,
> It says sarcastically, Walt, you understand enough . . . . why don't you let it out then? (50-51)

詩人は発話によって世界を包含する。Whitmanにとって「声」とは、あらゆる間接性を排除した直接的な行為としての「声」である。

自らの「声」を前景化するにあたって、Whitmanはまず『草の葉』が書かれたものであることを否定する。

> Have you practiced so long to learn to read?
> Have you felt so proud to get at the meaning of poems?
> . . . . . .
> You shall no longer take things at second or third hand . . . .nor look through the eyes of the dead. . . . nor feed on the spectres in books,
> . . . . . .
> I have heard what the talkers were talking. . . . the talk of the beginning and the end,
> But I do not talk of the beginning or the end. (26)

引用の最初の二行で否定されているのは詩を読むことと、その意味について考えることである。その後の詩行では、書かれたものとはWhitmanにとって結局何らかの現実を代理表現したものに過ぎないことが明らかにされている。さらに、"the talk of," つまり、「～についてのおしゃべり」が否定される。言い換えれば、事実確認的に、何かについて話すことが否定されているのである。Whitmanにとって、書くという行為は、詩的世界の外部にある現実を二次的に描写することに過ぎない。このような間接性は、Whitmanの詩学にとって致命的なものである。詩人は自らが世界を歌うと同時にその世界を創造するので、詩的世界の外部にある現実世界を二次的に表現することは、自らの言葉の力の敗北を認めることに他ならない。『草の葉』が書かれたもの、つまり、事実確認的なものであると認めることは、自らの詩的世界の外部に言及していることを認めることであり、詩人にとっては致命的なこととなる。詩人は、自らの言語によって作り上げた世界の優位性を主張しなくてはならない。我々が詩を読むとき、現実と非現実のはざまに立つわけであって、もし、その詩が、事実確認的なものであれば、何らかの現実を記述/代理表現したものであることとなり、その詩をあくまで虚構としてしか認識しないであろう。上記の引用にもあるように、Whitmanは、自らの詩が読まれることを拒絶する。Whitmanにとって、

> A perfect writer would make words sing, dance, kiss, do the male and female

act, bear children, weep, bleed, rage, stab, steal, fire cannon, steer ships, sack cities, charge with cavalry or infantry, or do any thing, that a man or woman or the natural powers can do. (5)

つまり、Whitmanは自らの言語を書かれたものに対置し、一つの行為であると主張しているのだ。行為遂行的な発話は、外部の現実に言及するのではなく、それ自体が構成する現実に言及するという自己言及的性質によって特徴づけられる。つまり、Whitmanの行為を成す文体は、外部の現実に対して、自らが構成する世界の優位性を主張しているのである。詩が、記述的なものではなく、行為として機能しているとき、我々はその行為を単なる虚構として排除することは出来ず、参加することを強いられ、現実と非現実の世界とが逆転しうるものとなるのである。つまり、行為遂行的発話は、真偽を判断することが出来ないため、Whitmanは虚構と現実のはざまを突き破り、今ここで本を読んでいる我々の前に立ち現れるのである。

ジャーナリストから国民詩人への夢想を胸にWhitmanはいかに自分の詩人としての門出において自己規定を行っているか、“Song of Myself”の冒頭の一節をとりあげてみよう。

I celebrate myself,
And what I assume you shall assume,
For every atom belonging to me as good belongs to you. (25)

この一節は何らかの事実ないしは現実に関しての陳述というよりはむしろ一つの発話という行為である。詩人は何の前置きもなく突然発話を開始する。この詩行の背後から聞こえてくる「声」によって詩人は我々の前にその姿を現すのだ。詩人は発話することによって、まず自らの存在を規定し、「賞賛する」という行為を行う。さらに、現在時制を用いることによって、詩人は百年前、別の場所にいた詩人としてではなく、「今ここ」にいる詩人として詩行の中から立ち上がってくる。この冒頭の一節においてWhitmanは声を発すると同時に自分の存在を主張しているのである。引用の最後にある“you”へと呼びかけ発話することで詩人は存在しているのだ。主体とは発話する主体としてのみ存在する。Whitmanは自らの「声」の持つ行為遂行的力によってまず第一に、自分自身を存在せしめているといえるであろう。

詩人の「声」が持つ今一つの機能に、命名作用がある。詩人の声は自らの存在を表明するだけでなく、それが名付けるものが実際に存在するかのように列挙していく。

> This is the press of a bashful hand. . . . this is the float and odor of hair,
> This is the touch of my lips to yours. . . . this is the murmur of yearning,
> This is the far-off depth and height reflecting my own face,
> This is the thoughtful merge of myself and the outlet again. (42)

この一節における指示代名詞の“this”が指示するのは、この詩行以外に存在しない。従って、自己言及的である詩行は、自らの物質性をアピールし、その行為遂行的「声」はシャーマンのごとく、あるいは、聖書における神の言葉のごとく事物を命名すると同時に存在せしめているのである。Whitmanの詩的世界の中では、言葉とその指示対象が互いに浸透しており、詩的世界の外部にある事物に言及するものではない。例えばカタログにおいても、詩行はその声が命名する事物の存在を生み出すと同時に、拡大された自我の一部として取り込んで行く。読者に向けられた詩行の直接性を失わせる言語の恣意性を回避する上で、Whitmanの「声」は言語とその指示対象との融合に決定的な役割を果たすのである。

『草の葉』の詩行が時に肉体性を主張する一方で、登場する詩人は必ずしも、肉体的、あるいは物質的にのみ存在するものではない。詩人は幾分特定し難く、時につかみ所のない存在である。この引用で示唆されている詩人の一部は、「詩人の手」という自らの物質性を主張すると同時に「髪の臭い」、「憧れのささやき」という非物質性をも主張する。Whitmanは、私自身としての『草の葉』の物質性と、そこから発せられる「声」の非物質性を同時に主張しているのである。こうした肉体的であると同時に、気体のような性質を持つ詩人は時間空間をたやすく超越する。第一人称現在時制からなる詩行においては、“here”は“everywhere”を意味し、“now”は“forever”を意味することとなる。また、英語の二人称の代名詞が、単数と複数が同型であることを濫用して、Whitmanは、聴衆に話しかけると同時に個人にも話しかけているのである。このように、物質的であると同時に非物質的な詩人は時間空間を超越し、あらゆるものを自分の詩の中へと取り込んでゆく。

Do you not know how the buds beneath are folded?
Waiting in gloom protected by frost,
The dirt receding before my prophetical screams,
I underlying causes to balance them at last,
My knowledge my live parts . . . . it keeping tally with the meaning of things,
Happiness. . . . which whoever hears me let him or her set out in search of
this day. (51)

"tally" というのはWhitmanが好んだ「声」を表すメタファーである。Whitmanはここで自らを声と見なしており、その声によって言葉と物とを符合させるのだ。「声」のイメージは『草の葉』の直接性を保つ上で決定的な役割を演じている。Whitmanは書くことによって外的事実を恣意的に言及するのではなく、声によって、自らが命名した世界を創造し、言葉とその指示対象を融合させるという方法を採っているのである。そして、一人称現在時制の文を多用することで、あらゆる間接的表現を排除し、自らの声による直接的行為を強く主張している。『草の葉』の主人公、Walt Whitmanは、本という物質として存在すると同時に、行為を行う「声」として存在しているのである。(6)

II

詩行の直接性を主張するからにはその指向する対象が必ず存在しなくてはならない。『草の葉』がどんなに直接的なものであったとしても、それを受けとめるものがいなくては無に等しいものとなる。初版の序文では、"The proof of a poet is that his country absorbs him as affectionately as he has absorbed it." (24)と述べ、同時代のアメリカの読者達が彼の詩を快く受け入れてくれることを期待している。Whitmanの「声」が持つ直接性にとって必要不可欠なのが二人称の代名詞「あなた」の存在である。『草の葉』には大統領から売春婦に至るまで様々な人物が登場する。しかし、これらの人々は「あなた」ではなく、Whitmanの拡大された自己の一部にすぎない。『草の葉』に登場する唯一の他者と言えるのが「あなた」の存在である。Whitmanは『草の葉』において、「わたし」という一人称の代名詞を多用し、自らの自己中心性を強く主張する。その一方で、「わたし」は「あなた」に大きく依存しているのだ。先ほど引用した "Song of Myself" の冒頭の一節においても、「わたし」が「わたし自身」を賛美できるのは、

「わたし」と同じ原子からなる「あなた」の存在があるからに他ならない。「わたし」と「あなた」は相互に依存しているのだ。ここでは、「あなた」という二人称の代名詞がWhitmanの行為にどのような役割を果たしているか見ていきたい。

Whitmanは“I celebrate myself,”と特定の時空から突如として発話する声によって自らの存在を確立すると先程述べた。しかし、彼が「わたし」と発話するとき、その「わたし」を規定し、確立するのは他者、つまり「あなた」の存在である。「わたし」が「あなた」に向かって発話するとき、それは何らかの外的事実に言及するのではなく、自己と他者の存在を確立するのである。Whitmanは“Song of Myself”の冒頭で、「わたし」と「あなた」が同じ原子から成り、同質であることを強調するが、このとき彼はなによりも自己と他者の存在を宣言しているのである。もし、他者が本当に自己と同質であるなら、そんな宣言は全く無効なものに成らざるを得ない。他者とは唯一「わたし」の思うがままにならないがゆえに他者なのである。しかしWhitmanは、ヴィジョンが最も昂揚しているときには、他者の他者性を認めようとはしない。

> I know perfectly well my own egotism,
> And know my omnivorous words, and cannot say any less,
> And would fetch you whoever you are flush with myself. (74)

このようにWhitmanが他者性を無視したことを初めにD. H. Lawrenceが指摘して以来、今日まで多くの批判にさらされてきた。(7) 後述するが、『草の葉』における「わたし」と「あなた」との関係は常に交換可能なものなのだ。「わたし」と「あなた」が交換可能なものであるということは、異質性と同質性を混同しているということにもつながるであろう。しかしながら、昂揚したヴィジョンによって他者と自己の区別が付かなくなるWhitmanであるが、時にはいかに「わたし」が他者に依存しているかを露呈する。

> Come closer to me,
> Push close my lovers and take the best I possess,
> Yield closer and closer and give me the best you possess.

This is unfinished business with me . . . . how is it with you?
I was chilled with the cold types and cylinder and wet paper between us.

I pass so poorly with paper and types . . . . I must pass with the contact of bodies and souls. (87)

この一節は後に削除されることとなるが、ここでWhitmanは読者が不快と感じるほど肉薄する。引用の五行目の動詞が過去形になっていることが示唆するように、「わたし」はこの本が開かれ、読まれずには存在し得ないのである。また、"These are the thoughts of all men in all ages and lands, they are not original with me, / If they are not yours as much as mine they are nothing or next to nothing, (41)" というとき、Whitmanは他者への依存をあらわにしている。Whitmanが「わたし」というとき、読者に依存していることは必然的である。Ⅰで見てきたように、『草の葉』は、詩としてのWhitman自身の「声」を強く主張したものであった。自らが「声」として存在するためには、聴衆が必要なのである。言い換えれば、コミュニケーションが成り立つためには必ず他者を必要とするということである。Whitmanが自らの行為を成立させるためには、読者に大きく依存する必要があったのである。

Whitmanが、『草の葉』が書かれたものであるということを否定し、その「声」に特権的地位を付与していることは、読者との関係にも微妙に影響を与える。『草の葉』のテキストは、Whitmanの声を前景化しているが、Whitmanは、その声が、自らのものだけでなく、読者のものにもなりうることを示唆している。

It is you talking just as much as myself . . . . I act as the tongue of you,
It was tied in your mouth . . . . in mine it begins to be loosened. (82)

ここでは、今ここで読まれている詩行が黙読されているのではなく、音読されていることが示されている。つまり、Whitmanが詩行としての自己を、読者の「舌」と定義するとき、Whitmanは自らの詩が音読されることを想定しているのだ。Whitmanはなぜ初版で著者名を入れなかったかについてこう答えている。"It would be ridiculous to think of Leaves of Grass as belonging to any one person: at the most I am only a mouth-piece." (8) 詩行とし

てのWhitmanは、主語である「わたし」の権威を絶対的に主張することはなく、それは誰のものにでもなりうることを示しているのである。従って、我々が、『草の葉』の詩行を音読するとき、Whitmanの「わたし」は、読者の「わたし」となり、発話の主体と客体は逆転するのである。つまり、『草の葉』において著者と読者は常に相互に交換可能なものなのである。例えば、先に引用した“Song of Myself”の冒頭の一節を例にとってみよう。これを我々が音読するとき、詩人の「わたし」という主体と読者の「あなた」という客体の地位は、完全に逆転する。詩行から立ち上がる声は、公私の境界線に揺さぶりをかけるのだ。今話しているのはWhitmanなのか、私自身なのか、我々は困惑する。そして、我々は自らを「賞賛する」という行為を詩人と共有させられることになるのだ。行為遂行的発話の性質によって、我々は詩行を発話すると同時に行為を行うことを強いられるのである。つまり、「賞賛する」という行為は、非現実の詩的世界においてではなく、今ここでそれを読む読者によって現実に遂行されるのである。『草の葉』における「声」の行為遂行的力は、一人称と二人称の代名詞が多用され、多くの動詞が現在時制からなっているというその特異な文体によって与えられているのである。こうした効果は、初版においてWhitmanが著者名を放棄したことによってさらに強められる。

Whitmanがカタログにおいて、様々な民衆と融合し発話するとき、それは自らが様々な読者に受け入れられ、読者の肉体を借りて発話するさまを夢想しているのである。詩人は様々な人々に没入した後、次のように語る。

> Somehow I have been stunned. Stand back!
> Give me a little time beyond my cuffed head and slumbers and dreams and gaping,
> I discover myself on a verge of the usual mistake. (68)

この一節からも分かるように、Whitmanが他者に没入しているときには自らの主体性を放棄しているのである。もちろんこれは、自らの主体性を放棄し他者へと差し出す行為を二次的に描写したものに過ぎない。だが、カタログにおいて夢想しているように「声」を表す詩行としてのWhitmanは、読者に音読され、読者と融合することを主張しているのである。Whitmanがしばしば、自らの不死性を強調することが出来るのは、このように声として読者に乗り移ることを意図していたからに他ならない。読者が『草の

葉』を音読するときWhitmanは言葉を通して読者の肉体に憑依し、復活するのである。

以上見てきたように、Whitmanが何らかの行為を行う上で、他者/読者/「あなた」は必要不可欠な存在である。『草の葉』は、現実を描写した物語ではなく、読者の参加によって初めて発生する一つの行為なのだ。Whitmanの行為は読者への依存の上に成り立っているのである。Whitmanの身体としての詩、あるいは声としての詩は常に、現実に生きた詩人、Walt Whitmanと読者との断絶を埋め合わせる行為を行っているのである。しかしながら、『草の葉』はWhitmanから読者への一方的な発話ではなく、「わたし」と「あなた」は常に交換可能なものであり、相方向的な対話となりうる言語空間を構成している。"Song of Myself" は、"I" で始まり "you" で終わる。これまであまり指摘されてはいないが、初版においては、最後のピリオドが欠けている。こうした事実も、始まりと終わり、あるいは「わたし」から「あなた」へという一方通行的な流れをWhitmanが望まなかったことを示唆している。『草の葉』において、Whitmanの行為は読者に共有されて初めて遂行されるものなのである。

結

以上見てきたように、『草の葉』におけるWhitmanの言語観はあらゆる側面において行為遂行的であり、事実確認的なものと対立している。『草の葉』出版以前、彼は民主党系の新聞のジャーナリストとして、ジャクソニアン・デモクラシーの理想を賛美していたが、奴隷制をめぐる国家分裂の危機を前にして、民主党そのものに亀裂が生じたのである。彼は相変わらず、自らの理想を記事の中で訴えたが、現実との断絶は深まってゆくばかりであった。新聞の記事とは、いわば事実確認的なものである。一方、『草の葉』の文体は行為遂行的なものである。Whitmanが突然詩人として生まれ変わった背景には、事実確認的な文への幻滅があったかも知れない。彼は、行為遂行的な文体によって、国家を一つに結びつけようとしたのである。

『草の葉』の直接性は、行為遂行的発話に大きく依存している。Whitmanの「声」とはあらゆる物の断絶を一つに結びつけるための行為としての声なのである。Whitmanにとっての中心的断絶とはあらゆる人間の間の断絶に他ならない。結局のところ、彼が『草の葉』において行ってい

ることとは、詩的世界において唯一の他者である読者を誘惑することであると考えられる。Whitmanの行為遂行的発話は、読者の注意を引きつけ、その行為に参加させる試みなのである。『草の葉』の中から詩人は読者に呼びかけることによって、一つの関係を樹立し、対話を求めている。Whitmanの「声」は、時に自らを「舌」そして「息」であると定義し、読者に詩行を音読することを誘っている。後にWhitmanは、"I meant Leaves of Grass, as published, to be the Poem of Identity, (of Yours, whoever you are, now reading these lines) . . . . "(9) と書いている。つまり我々が詩行を音読したとき、Whitmanの「わたし」は読者の「わたし」となり、読者は自己同一性を獲得するのである。Whitmanは、自らの行為によって、虚構の世界から現実の世界へと現れ、読者に直接的な影響を及ぼすのだ。Whitmanが同質性と異質性、個人的な同性愛と公的な人間愛を時に混同したことは糾弾されてしかるべきかも知れない。しかしながら、それはすべてを包括しようとしたために生じる矛盾であって、少なくともすべての人間をまとめて救済しようという意図だけは賞賛したい。『草の葉』初版のテクストは常に「わたし」と「あなた」の断絶を埋める役割を果たし、断絶した人間関係を和解へと導くのである。

[注]

使用textは、Walt Whitman, *Walt Whitman's Leaves of Grass: The First (1855) Edition.* Edited with an Introduction, by Malcolm Cowley. (New York: Penguin Books, 1986).に拠った。

引用後の数字はページ数を表す。

(1) Harold W. Blodgett and Sculley Bradley, eds., *Leaves of Grass, A Norton Critical Edition,* (New York: Norton, 1972), p.505.

(2) Ibid., pp. 573-74.

(3) J. L. オースティン著, 坂本百大訳『言語と行為』(大修館書店,1978). 後にAustinは、事実確認的発話も発話という行為を行うものだとして、この分類を排除する。そして、あらゆる発話という行為を、「発語行為(locutionary act)、」「発語内行為(illocutionary act)、」「発語媒介行為(perlocutionary act)、」という３つの位相に分類する。なお、C. Carroll Hollis, *Language and Style in 'Leaves of Grass,'* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1983).は、Whitman研究に初めてを言語行為論を導入した。

(4) Blodgett and Bradley, p.753.

(5) Horace Traubel ed., *An American Primer. By Walt Whitman. With Facsimiles of the Original Manuscript,* (Boston: Small, Maynard & Co., 1904), p.16.

(6) Harold Bloom, "Whitman's Image of Voice: To the Tally of My Soul," in *Walt Whitman*, ed., Harold Bloom, (New York: Chelsea House Publishers, 1985), p. 132. Bloomは、"As Adam Early in the Morning" をとりあげ、この詩の過程について、"Behold Whitman as Adam; do not merely regard him when he is striding past. The injunctions build from that 'behold' through 'hear' and 'approach' to 'touch,' a touch then particularized to the palm, as the resurrected Walt passes, no phantom, but a risen body. 'Hear my voice' is the center. As Biblical trope, it invokes Jehovah walking in Eden in the cool of the day, but in Whitman's American context it acquires a local meaning also. Hear my voice, and not just my words; hear me as voice." と説明している。

(7) D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature*, (1923; rpt New York : Penguin, 1977). なお近年では、David Simpson, "Destiny made manifest: the styles of Whitman's poetry," in *Nation and Narration*, ed., Homi K. Bhabha, (New York: Routledge, 1990).などがある。

(8) Alan Trachtenberg, *Reading American Photographs, Image as History Mathew Brady to Walker Evans*, (New York: Hill and Wang, 1989), p.65.

(9) Blodgett and Bradley, p.752.